

5 石原忍と心理学

鈴木 聡 志

東京農業大学

石原式色覚検査表（石原表）で知られる東京帝国大学医学部教授石原忍と心理学との関わりについて報告する。これについては石原表の開発にも色覚異常に関する彼の説にも関係が深いにもかかわらず、ほとんど知られていない。

(一) 心理学者達との交流

石原は東京帝国大学医科大学卒業後、近衛歩兵第二聯隊に入隊し見習医官になったが、陸軍で眼科専門の軍医が必要になったため、一九〇八年一二月に東京帝国大学大学院に入学し眼科学の研究を始めた。大学院時代はちょうど二年間だったが、この間に彼は、東京帝国大学文科大学で心理学を修めて卒業し一九〇九年に「心理学通俗講話会」を結成した若い心理学者達と知り合った。

石原は自伝でこう記している。「…東大の心理学を卒業した新進の、野上俊夫、上野陽一、大槻快尊などの学士が、『心理研究』という雑誌を出したり、通俗講演会を開いたりして、心理学の普及につとめていたが、この雑誌に『視的錯覚』の話が載っていた。それを読んで私は非常に興味を覚え、自分でもすこし研究してみたりしたが、これが後日、色盲検査表を考案する際に、非常に役に立った。この心理学研究会の同人の一人である菅原教造氏は、色覚について研究していて、ドイツから、色や明度の標準になる紙を取寄せていたので、私はそれを、すこしづつわけて貰って、色盲の研究に使った。」

この中の上野陽一、大槻快尊、菅原教造が心理学通俗講話会設立のメンバーで、野上俊夫は賛助会員だった。石原は陸軍軍医学校教官時代の一九一二年九月二一日にこの心理学通俗講話会で「色盲の話」という題で講話をし、その記録は『心理研究』第十一号に掲載された。同誌の別号には「色盲及び色覚薄弱者の眼に映じた絵画」という口絵が載っているが、これは石原

が紹介したものと思われる。石原は心理学通俗講話会での講話の二ヶ月後に留学のためドイツに出発した。その後の『心理研究』誌には色覚異常に関する記事が登場しなくなるので、石原と心理学者達との交流はこの時に途絶えたようである。

さて、先の石原の自伝によると、『心理研究』に載った「視的錯覚」に興味を覚え、それが後日石原表を作る際に役に立ったということであるが、『心理研究』には「視的錯覚」と題する文章もそれに類するものも載っていない。それでは「視的錯覚」とは何か？それは、『心理学通俗講話』第二号に載った上野陽一の「眼の誤りの話」であると推測される。

(二) 色覚説

石原は先天性色覚異常の原因について独特の考えをもっていた。それは、胎生期の眼の発育不全を色覚異常の原因とする説である。

『日本色盲検査表 新訂第六版』中の「附録 通俗色盲解説」において彼は、「先天性色盲は眼の発育不全である」と断定し、「全色盲」「全色弱」「紅緑色盲」「紅緑

色弱」の四種類の色覚異常ができる理由として、フランクリン、シエンクらの仮定説であると断った上で、以下のような説明をしている。人の眼は胎生期に最初、全色盲であり、発育の第二期に青と黄が見えるようになり、第三期に黄を感じる機能が分化して赤と緑を感じるようになる。この説を正しいものとするれば、色覚の発育がその第一期で止まったものが全色盲となり、第二期で止まったものが紅緑色盲となる。また発育の第二期が不完全に行われれば全色弱、発育の第三期が不完全に行われれば紅緑色弱になる。

この「仮定説」を唱えた二人のうちの一人、フランクリンとはアメリカの心理学者 Christine Ladd-Franklin のことであり、彼女の色覚説はラッド・フランクリン説として知られている。彼女の説では色盲についてしか説明していないので、眼の発育不全で色弱も説明する石原の説は彼独自のものといえよう。